

第2回 SPARC Japan セミナー2013

「人社系オープンアクセスの現在」

歴史学の研究手法・環境とオープンアクセス —日本近現代史研究の現場から—

石居 人也

(一橋大学大学院)

講演要旨

人文・社会系の中でも、とりわけオープンアクセスと縁遠い学問分野の一つとみられているのが歴史学ではないでしょうか。そこで、歴史学（日本近現代史）を専攻する私自身の研究手法や研究環境、オープンアクセスの活用経験などをご紹介しますことをとおして、歴史学にオープンアクセスはなぜ馴染みにくいのか、あるいは本当に馴染みにくいのか、といったことを皆様とともに考えてみたい。



石居 人也

一橋大学大学院社会学研究科准教授。町田市立自由民権資料館学芸員を経て、2012年より現職。日本近現代史、とりわけ生・老・病・死に対する人びとの向きあい方、およびそれらが実践される地域社会のありように迫ることを通して近現代の日本社会について考察している。

私は、文学部・大学院文学研究科で歴史学を学び、今は社会学部・大学院社会学研究科で歴史学を教えています。この分野は、人文社会系の中でも恐らくオープンアクセスと最も縁遠い分野の一つとされているのではないかと思います。特に私は日本の歴史が専門ですので、日本史分野を中心にしながら、歴史学の研究者がどんな手法で研究をしており、オープンアクセスとどのような関わり方をしているのかという一例をお話ししたいと思います。

歴史学の研究手法

まず、歴史学のオーソドックスな研究手法は大きく二つに分かれます。一つ目は、「史料発掘型」です

(図1)。歴史学では歴史資料を「史料」と呼びます。この手法では、最初に史料の調査を行うところから研究が始まります。研究者が明確な目的意識を持って、

歴史学の研究手法 A

- ◆ 史料(歴史資料)発掘型
 - ・史料調査(能動的/受動的)
 - ・史料整理(所蔵家・機関/受入機関・個人)
 - ・目録作成・研究史把握
 - 解題・報告書を執筆
 - ・問題関心に照らして論文執筆
 - ⇒ 史料群の全体像把握・提示が優先
 - ⇒ 調査的側面を重視

(図1)

あらかじめ対象を選んで調査を始めることもあれば、逆に研究者が依頼を受けて、本人の主體的な意思とは別に調査が始まるケースもあります。

史料調査では、現地（史料を持っている家や機関）へ行って、あるいは逆に史料を預かった場合には、それを受け入れた側で、史料整理という作業を行います。その史料の中身を確認し、いつの時代のどのような内容のものなのかを一点一点把握していくのです。史料群によっては数万点、数十万点という規模ですので、それを一点一点確認していただくだけでも、かなりの時間がかかる作業です。そして最終的には、目録という形でその全体像を示すことが、史料調査・整理という作業の一般的な終着点になります。目録を作成するに当たっては、史料の大まかな性格をつかんだ上で、その全体像を把握するため、その分野に関するどんな研究成果があるのかを確認します。そして、全体像を示す目録に、「解題」と呼ばれる史料についての解説を付して公開するという段取りが一般的です。ただ、史料が全て公開までたどり着くかという、時間、分量、出版事情等、種々の問題があり、必ずしも公開に至るわけではありません。さらにその先に、ようやく、研究者の問題関心に照らして論文を執筆するという段階があるのです。かなり遠回りの作業と思われるかもしれませんが、このパターンは、史料群の全体像の把握・提示を優先的に考える研究手法ですので、調査的側面を重視する研究の在り方と言えると思います。

二つ目の研究手法は「課題設定型」です（図2）。

歴史学の研究手法 B

- ◆ 課題設定型
 - ・問題関心
 - ・課題と論点の整理(研究文献)
 - ・史料収集(所蔵機関・所蔵家など)
 - ・史料分析(実物・画像・既刊史料集など)
 - ・論文執筆
 - ⇒目的意識が優先
 - ⇒研究(論文作成)的側面を重視

(図2)

これは一般的な研究の型かもしれませんが、研究者の問題関心が所与のものとしてあり、それに基づいて課題と論点の整理をするというものです。「史料発掘型」は史料に先に出合って研究成果に進むパターンでしたが、「課題設定型」は研究成果との関わりを先に考えた上で史料に当たります。そこで初めて必要な史料の収集を行うことになり、その次の段階として史料の内容を分析し、論文を執筆します。「課題設定型」はどの学問分野でも比較的イメージしやすい研究の型で、「史料発掘型」の方がむしろ歴史学という分野に特異なのかもしれません。

ちなみに、「史料発掘型」の方は、大変な時間をかけて整理をしても、最終的にそれだけでは論文にならない場合もあるので、費やした時間に対して研究成果を生みだしにくいともいえます。調査的側面が強い「史料発掘型」に対して、「課題設定型」は、言うまでもなく目的意識が優先する研究の手法であり、研究的側面が重視されます。近年では「課題設定型」の研究が主流になりつつあります。研究成果を出すということが、より求められる学問状況になってきているからです。

研究環境、研究者の「生態」と オープンアクセス

最初に、歴史学はオープンアクセスと縁遠いと言いましたが、これは歴史学の中にある、「原史料」「原文書」などと呼ばれる現物に触れなければ研究は始まらないという「神話」のようなものの影響が大きいと思います。もちろん歴史学において、史料に触れずに研究することはできないのですが、この考え方を重視するあまり、一次史料の象徴である古文書に触れることに頑ななまでにこだわってきたのが、歴史学ではないかと思います。その結果、とにかく史料調査、史料発掘が歴史の研究には不可欠だと考えられるようになってきているのです。

そして、史料発掘と精緻な史料分析に基づいて研究が重ねられてきたので、従来ある研究成果に真正面か

らぶつかっていったり乗り越えようとしても、同じ史料を見ているだけでは乗り越えられないということがしばしば起こります。そうすると、自分も調査をして新しい史料を見つけてそれを覆さなければ、その研究の先には行けないのだ、やはり史料発掘が不可欠だということになりがちです。従って、二次史料あるいは活字の文献を分析するだけでは研究としては不十分だという認識が、これまで歴史学の世界の「常識」になっていたのだと思います。

もう一つ、歴史学の研究者の「生態」とオープンアクセスとの関わりにも触れておきたいと思います。これは歴史研究者に限らないかもしれませんが、顕著な傾向としてうかがえるのは、「史料」という、形あるモノへの執着心の強さです。どんなに不必要だと思われるモノでも「史料」になるかもしれない、過去のモノはもちろん、現在、自分の身の回りにあるモノも、将来の歴史研究における「史料」になるかもしれないという感覚が強いのです。そうすると、周りにあるモノが捨てられず、研究室は第三者から見ればゴミだらけという状況になっていることが少なくありません。

それから、形あるモノとしての出版物を生み出す、出版文化に親近感を持つ傾向もあります。これは先ほど言った、モノへの執着心ということとも関わりますが、実際にデジタル化された文献や史料を読むときにも、一旦はプリントアウトしないと読めない、紙媒体でないと頭に入ってこないというような「生態」も、歴史研究者にはあるような気がします。もう少しだけ踏み込んでアウトプットという面で考えると、早さよりも確実性、つまり数多くの研究成果を出すことよりも確実性を重視している結果なのかもしれません。あるいは、自らも紙媒体のモノを残したいという意識とも通底しているような気がします。

手法の変化とオープンアクセス

ただ、歴史学の研究もずっと変わらずにいるわけではなく、もちろん変化の兆しは見えています（図 3）。特に 1990 年代ころから顕著になっているのは、従来

の実証の学問という在り方から、解釈の学問へという転回です。歴史学界では、歴史学における言語論的転回あるいは構成主義的歴史学などと称されています。

従来歴史学では、史料の厳密な解釈を重ねていけば、史実（歴史的事実）にたどり着くことができるという考え方が支持されてきました。しかし、1990 年代以降の歴史学では、歴史研究の成果というのはあくまで一つの歴史叙述であり、歴史の解釈にすぎない、そのことを自覚した上で史実を構成していくのが歴史学だと理解する必要があると言われるようになってきました。

こうした考え方を受け入れていない研究者もたくさんいますが、それをひとまずは受け入れるとすれば、歴史学は史料の厳密な解釈に基づいて歴史像を提示し、それについての議論を通して解釈の妥当性を鍛えていく学問へと展開しつつあると言えるでしょう。そう考えると、ある人が描きだした歴史像の検証可能性をどのように担保していくのかということが、より重要になります。そうすると、ある研究者が典拠として用いた史料や文献、参照情報といったソースへのアクセスが重要になってくるわけです。

環境の変化とオープンアクセス

歴史学において、扱われる史料や史料へのアクセス方法は、多様化してきています。古文書だけでなく、活字媒体や図像なども重要な史料と認識されるようになってきましたし、古文書も含めた史料そのものがウェブで公開されるようになり、実際に現地に行かなくて

手法の変化とオープンアクセス

- ◆ 実証の学から解釈の学へ（の兆し）
 - ・ 言語論的転回と構成主義的歴史学
→ 史実（歴史的事実）の解明から
史実に迫る「史実」の構成へ
 - ・ 史料の厳密な解釈にもとづく歴史像の提示
→ 議論をとおした解釈の妥当性の鍛錬
 - ・ 検証可能性の担保がより重要に
⇒ 典拠・参照情報のソースへのアクセス

（図 3）

も史料が見られるようになってきています。現地に行き調査を行うにしても、調査から公開までのサイクルが早くなってきているように感じます（図4）。

それを可能にする方法の一つとして実践しているのが、段取り自体は「史料発掘型」の研究手法を取りつつ、ワーキングペーパーなどを使って、整理途中の段階でも、あるまじりごとくに目録化して公開していく進め方です。そうすることで、ある人が一旦手を付けた史料について、調査・整理作業が全て終わるまで第三者はアクセスできないという「抱えこみ」の状況から、少しでも史料を「解放」することができるのではないかと考えます。いずれにしても、研究にせよ、史料調査にせよ、不断の更新可能性があるということへの自覚と対応が、これからの歴史学には求められると思います。

今後の展望

歴史学の中では、やはりいまだにオープンアクセスへのニーズは高くないような気がします。それは、研究手法・環境、あるいは研究者の「生態」によるところが大きいのではないでしょうか。歴史学の世界では、厳密さや厳格さが今も高い価値を持つものとして位置付けられています。それが結果として、歴史学の強みであり、一方では弱みにもなっているように感じます。

ただ、変化の兆しは現れつつあり、さまざまな形で公開されている情報に依拠するなど、インプットの面ではオープンアクセスを活用する機会が増えてきてい

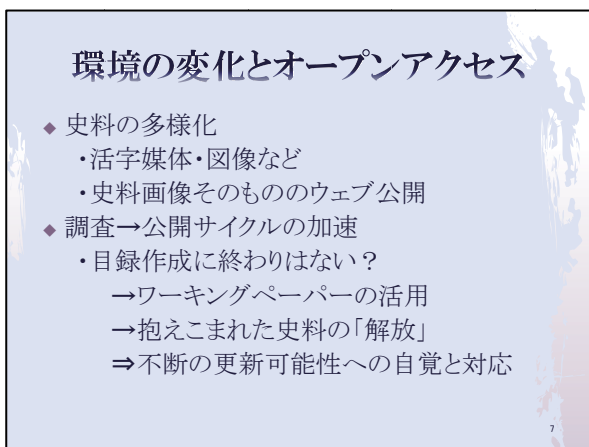
ます。そういう意味では敷居は下がってきているのですが、アウトプットでオープンアクセスを活用することへの意識はまだ強くないと思います。そのため、やはり学問固有、あるいは研究者固有のニーズに応じたオープンアクセスの在り方の模索が必要になってくるのではないかと、研究の現場からは考えられるのです。

●Q1 国立情報学研究所の武田です。あえて聞きたいのですが、歴史学は史料を調べることが一つの重要なミッションであり、自分たちも史料をつくり、結果的に自分たちのものを残すわけです。それならば、オープンアクセスによって、より多く自分たちの史料を残すというのは、何かいけないことのような気がするのですが、それは心の中では矛盾しないのでしょうか。

●石居 確かにオープンアクセスにした方が数は残せるかもしれないのですが、一方では厳密さ、厳格さが求められており、残すにしても、時間をかけて完成度のある程度高めたものを残したい、あるいは形あるモノとして残したいという意識があります。もちろん数をたくさん残したい、あるいは残している研究者もたくさんいるので、そういう点では葛藤もあるとは思いますが、現時点では紙媒体で完成度の高いものを残そうという意識の方が、往々にして勝っているのではないかと感じます。

●Q1 もう一つ、オープンアクセスからは外れますが、そもそもデータとして、目録などもオープンにアクセスさせるという動きはありますか。

●石居 まだ多くはないのですが、実際に私自身は少しだけそれをしてしています。データベースのようなものも含めてオープンアクセスと考えるのであれば、そういうオープンアクセスの在り方は、目録に関してはだんだんと増える傾向にあると思います。



(図4)

●Q2 英国のソフトウェア会社 Digital Science の四倉です。研究者の生態や行動パターンから非常に貴重なお話を頂きましたが、他の分野におけるオープンアクセスの推進には、やはりメディア側、学術誌や出版、広い意味でのデータベースからの動きもあります。歴史学に関するメディア側の状況はどうなっているでしょうか。

●石居 日本史分野では、学会誌のオープンアクセス化もほとんど着手されていない状況です。また、厳しい出版事情ではありますが、歴史学は比較的、論集や共同著作など、紙媒体で出版する機会がまだまだ多くあると思います。それは研究者の志向性との関わりもあるでしょうし、出版業界の事情もあるかもしれません。ですので、今のところ、出版業界との関わりで言っても、オープンアクセス化はそれほど進んではいないと思います。